

濱田 昌大（はまだ まさひろ）【JICA 青年海外協力隊】

赴任地：フィリピン共和国 イフガオ州ラガウエ町

職種：コミュニティ開発

赴任期間：2015年7月～2017年7月（予定）



## ○棚田保全基金について

年末のこの時期は、私が活動で関わる棚田保全基金を基に実施される、来年度のプロジェクトサイトを視察しています。毎日のように、イフガオ州内の広大な棚田の中をトレッキングしながら、耕作放棄地になった棚田や破損が著しい灌漑設備（山や川などから取水し、棚田に給水する設備）などを逐一、配属先のイフガオ州政府、文化遺産事務所のスタッフと一緒に確認しています。

先日も、イフガオ州のバナウエ町にある耕作放棄地と灌漑設備を視察しました。この耕作放棄地と灌漑設備は、来年度のプロジェクトサイトとして、リハビリテーションを予定しています。イフガオの棚田は、既に全体の2割から3割が耕作放棄地になっていると言われ、バナウエ町にも広大な耕作放棄地が広がっています。実際に、耕作放棄地を見て感じたことですが、その広大な耕作放棄地ゆえに、棚田保全基金のプロジェクトサイトの耕作放棄地をリハビリテーションすることさえ、10年どころか20年、いやそれ以上かかると思われます。毎年、リハビリテーションする棚田の総量（プラス）と耕作放棄地になる棚田の総量（マイナス）を加味すると、全体としては、耕作放棄地が増え続けているのが実情でしょう。つまり、毎年、限られた資金で少しずつ棚田を補修する棚田保全基金の仕組みだけではなく、時には、JICAでもこの機関でも良いので、まとまった資金を活用して、一気に棚田をリハビリテーションする必要性を感じた次第です。棚田保全基金にも限界があり、新しい取り組みが必要だと考えています。

なぜ耕作放棄地が増え続けるのかについて言えば、やはり、若い世代にとっては、肉体労働である農作業（稲作）は余り魅力がなく、学校を卒業すると、親から農業を継承せずに良いより仕事を求めて、首都圏のマニラなどに移住するという問題があります。また、稲作農家の収入は少なく、収穫された稲の多くは自家消費してしまい、市場に出荷するのはわずかだと言われています。つまり、若者にとって、農業をより魅力ある仕事に変えていくこと、具体的には、イフガオではティナオンと呼ばれる有機栽培された付加価値の高いネイティブ米を生産するなどして、農業を魅力ある産業に変えていくことが、耕作放棄地の増加に歯止めをかける有効な方法になります。

棚田保全基金のプロジェクトでは、棚田の耕作放棄地や灌漑設備をリハビリテーションするなど、主としてハードの面から棚田の保全を図っていますが、それと同じぐらい、農業の担い手の育成というソフトの面からのアプローチが重要になってきています。



バナウエ町の棚田調査の様子。耕作放棄地が目の前に広がっている。



大雨などにより、棚田が崩落してしまった。配属先のスタッフが、崩落箇所を測量している。



奥の棚田をよく見て欲しい。世界的に有名なバナウエ町の棚田だが、耕作放棄地が進むにつれて、地域や観光に与えるインパクトは、益々大きくなっていくだろう。